［ 表 ］


表１　周辺の遺跡一覧……９
表２　石製模造品有孔円板観察表（１）……85
表３　石製模造品有孔円板観察表（２）……86
表４　石製模造品剣形観察表……87
表５　臼玉観察表（１）……88
表６　臼玉観察表（２）……89
表７　臼玉観察表（３）……90
表８　石製模造品剥片等観察表（１）……91
表９　石製模造品剥片等観察表（２）……92
表10　遺構外出土遺物点数表 …… 125
表11　石製模造品出土遺跡一覧 …… 132
表12　分析資料一覧 …… 148
表13　テフラ分析結果 …… 150
表14　粒度分析結果 …… 152
表15　珪藻分析結果（１） …… 154
表16　珪藻分析結果（２） …… 155
表17　花粉分析結果 …… 157
表18　植物珪酸体含量 …… 158
表19　測定試料および処理 …… 164
表20　放射性炭素年代測定および
　　暦年較正の結果…… 165
表21　結果一覧表 …… 166
表22　樹種同定結果 …… 168


［写真］


1　遺跡　遠景…… 171
2　115号水路調査区　近景 …… 171
3　115号水路調査区　近景 …… 172
4　116号水路調査区　近景 …… 172
5　基本土層（１）…… 173
6　基本土層（２）…… 174
7　１号住居跡全景…… 175
8　１号住居跡細部…… 175
9　２号住居跡・２号土坑・２号溝跡全景… 176
10　２号住居跡細部…… 176
11　３号住居跡全景…… 177
12　３号住居跡細部…… 177
13　４号住居跡全景…… 178
14　４号住居跡細部…… 178
15　５号住居跡全景…… 179
16　５号住居跡細部…… 179
17　６号住居跡全景…… 180
18　６号住居跡細部…… 180
19　７号住居跡全景…… 181
20　７号住居跡細部…… 181
21　８号住居跡全景…… 182
22　８号住居跡細部…… 182
23　９号住居跡全景…… 183
24　９号住居跡細部…… 183
25　10号住居跡床面遺物出土状況…… 184
26　10号住居跡細部…… 184
27　11号住居跡全景…… 185
28　11号住居跡細部…… 185
29　12号住居跡全景…… 186
30　12号住居跡細部…… 186
31　１号土坑…… 187
32　１号流路跡全景…… 187
33　１号流路跡細部…… 188
34　４号流路跡全景…… 189
35　４号流路跡遺物集中域１出土状況…… 189
36　４号流路跡遺物集中域１出土状況…… 190
37　４号流路跡遺物集中域１出土状況…… 190
38　４号流路跡遺物集中域１細部…… 191

39　４号流路跡遺物集中域２細部…… 191
40　５号流路跡全景…… 192
41　５号流路跡断面…… 192
42　５号流路跡遺物出土状況…… 193
43　５号流路跡細部…… 193
44　６号流路跡全景…… 194
45　６号流路跡細部…… 194
46　７号流路跡全景…… 195
47　７号流路跡細部…… 195
48　１号遺物包含層全景…… 196
49　１号遺物包含層細部…… 196
50　１号整地範囲…… 197
51　遺構外出土遺物…… 197
52　その他の遺構…… 198
53　４～７・９号住居跡出土遺物…… 199
54　11・12号住居跡、１・３号土坑、
　　１号流路跡出土遺物…… 200
55　１号流路跡出土遺物…… 201
56　１・４号流路跡出土遺物…… 202
57　４号流路跡出土遺物（１）…… 203
58　４号流路跡出土遺物（２）…… 204
59　４号流路跡出土遺物（３）…… 205
60　４号流路跡出土遺物（４）…… 206
61　４号流路跡出土遺物（５）…… 207
62　４号流路跡出土遺物（６）…… 208
63　４号流路跡出土遺物（７）…… 209
64　４・５号流路跡出土遺物…… 210
65　５号流路跡出土遺物…… 211
66　６・７号流路跡、
　　１号遺物包含層出土遺物…… 212
67　１号遺物包含層、遺構外出土遺物…… 213
68　弥生土器…… 213
69　土師器転用研磨具…… 214
70　４号流路跡出土石製模造品（１）…… 215
71　４号流路跡出土石製模造品（２）…… 216
72　４号流路跡出土石製模造品（３）…… 217
73　４号流路跡出土石製模造品（４）…… 218
74　４号流路跡出土臼玉（１）…… 219
75　４号流路跡出土臼玉（２）…… 220
76　４号流路跡出土臼玉（３）…… 221
77　４号流路跡出土石製品（１）…… 221
78　４号流路跡出土石製品（２）…… 222
79　４号流路跡出土石製品（３）…… 223
80　４号流路跡出土石製品（４）…… 224
81　４号流路跡出土石製品（５）…… 225
82　４号流路跡出土スサ入り粘土塊・炉壁… 225
83　石製品・石器（１）…… 226
84　石製品・石器（２）…… 227
85　４号流路跡出土土師器転用研磨具集合… 227
86　土師器転用研磨具の痕跡パターン…… 228
87　石製模造品・臼玉の製作関連遺物…… 228
88　116－３グリッドＬＶ含有礫 …… 228
89　本遺跡の出土石製模造品に
　　用いられる石材…… 228

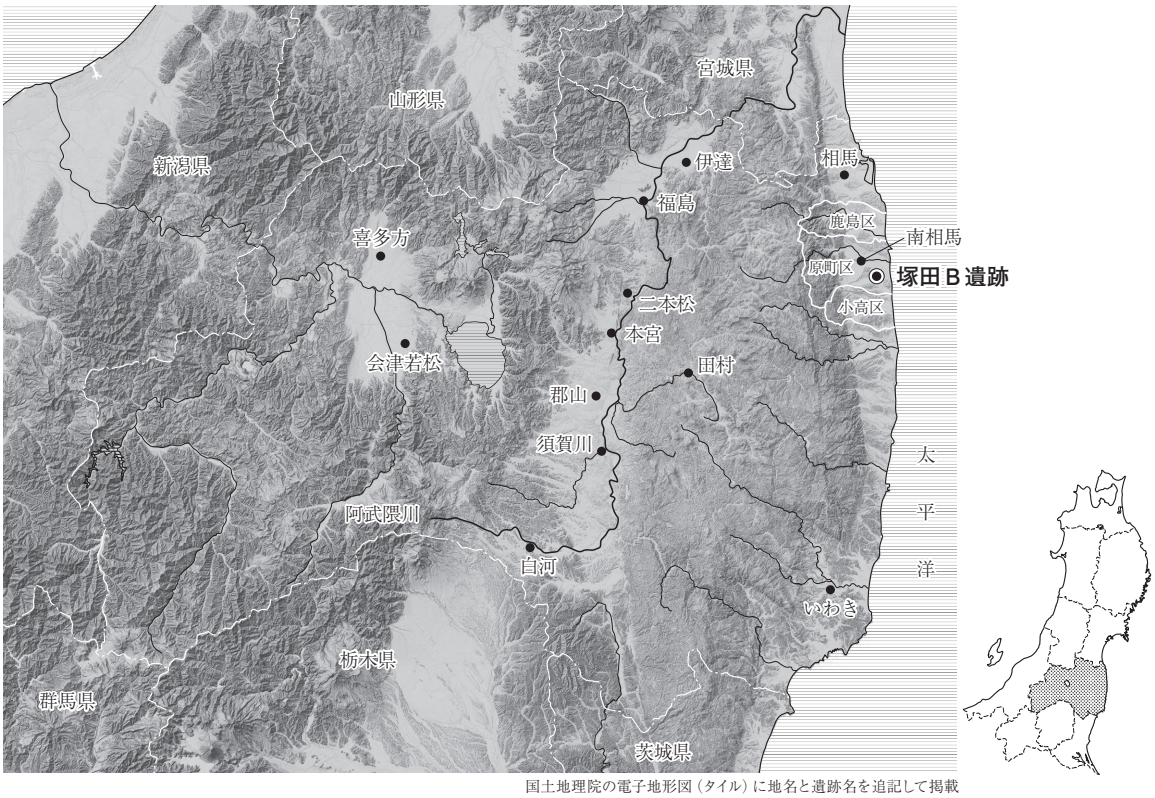
# 序　　章

## 第１節　事業の概要と調査に至る経緯

平成23年３月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生した。この地震により、太平洋沿岸周辺では広範囲に津波被害を受け、相馬港で高さ9.3m以上、小名浜港で3.33ｍの津波を観測した。津波被害により、福島県浜通り沿岸市町村面積の５％にあたる112㎢が浸水した。また、東京電力株式会社福島第一原子力発電所の事故により、大気中に高濃度の放射性物質が拡散し、広範囲が避難指示区域に設定された。

南相馬市を含む福島県沿岸の市町村では、震災以前は地域農業者を中心に農業用施設や農用地の保全・管理を行い、水稲を中心とした営農活動が行われてきた。しかし津波被害や原発事故に起因して、自主避難や作付け制限、除染等により営農再開ができない農地が散在し、面的な営農が進捗していないのが現状である。

農山村地域復興基盤総合整備事業は、農地の大区画化等、効率的に営農を行える基盤を整備し、担い手農家への農地利用集積を図り、農村地域の営農再開を加速化させ、地域の復興再生に資するものと位置付けられる。下太田地区では担い手農家への農地利用集積を図りながら、営農再開に向けた取組みが進捗している。本事業に係る南相馬市原町区太田地区の受益面積は157haである。




国土地理院の電子地形図（タイル）に地名と遺跡名を追記して掲載

**図１**　塚田Ｂ遺跡位置図

## 第２節　塚田Ｂ遺跡の略歴

塚田Ｂ遺跡は、平成27年に福島県教育委員会（以下、県教委）が行った農山村地域復興基盤総合整備事業に伴う分布調査によって、遺跡推定地（MSC-00.B7）とされた箇所である。その後、平成28年11月に試掘・確認調査によって、古墳時代の竪穴状遺構、溝跡、遺物包含層などの遺構が確認され、遺物は塩釜式や住社式の土師器や、縄文土器、石器などが出土した。この試掘・確認調査の結果を受け「塚田Ｂ遺跡」として、平成29年１月に福島県埋蔵文化財包蔵地台帳に新規登載された。平成29年２月には、遺跡南西側の広がりを確認することを目的として２度目の試掘・確認調査が行われ、竪穴状遺構や土坑、古墳時代の土師器が確認された。この結果を受け、市道を挟んだ西側の範囲が追加され、塚田Ｂ遺跡の保存面積は71,000㎡となった（木村2018）。令和４年度には、農山村地域復興基盤総合整備（太田地区）事業に係る区画整理工（用排水路工）に伴う990㎡を対象として発掘調査を実施した（本書）。

塚田Ｂ遺跡の現況は水田･畑作地･宅地である。1963年に撮影された航空写真では､蛇行する牛川、圃場整備前の小区画水田が確認できる。1928年に刊行された『日本石器時代遺物發見地名表第五版』には、「太田村下太田塚田」の遺物に「土器」と記載されている（東京帝國大学編1928）。本遺跡東側に立地する塚田遺跡では、竹島國基の踏査により土師器が採集されている（佐藤編2008）。塚田Ｂ遺跡の範囲内に居住する1923年生まれの住民によれば､1945年に塚田地区に入植し水田耕作を行った際、土中から素焼きの甕が多数に出土したことから、往古の墓跡と考えていたという。

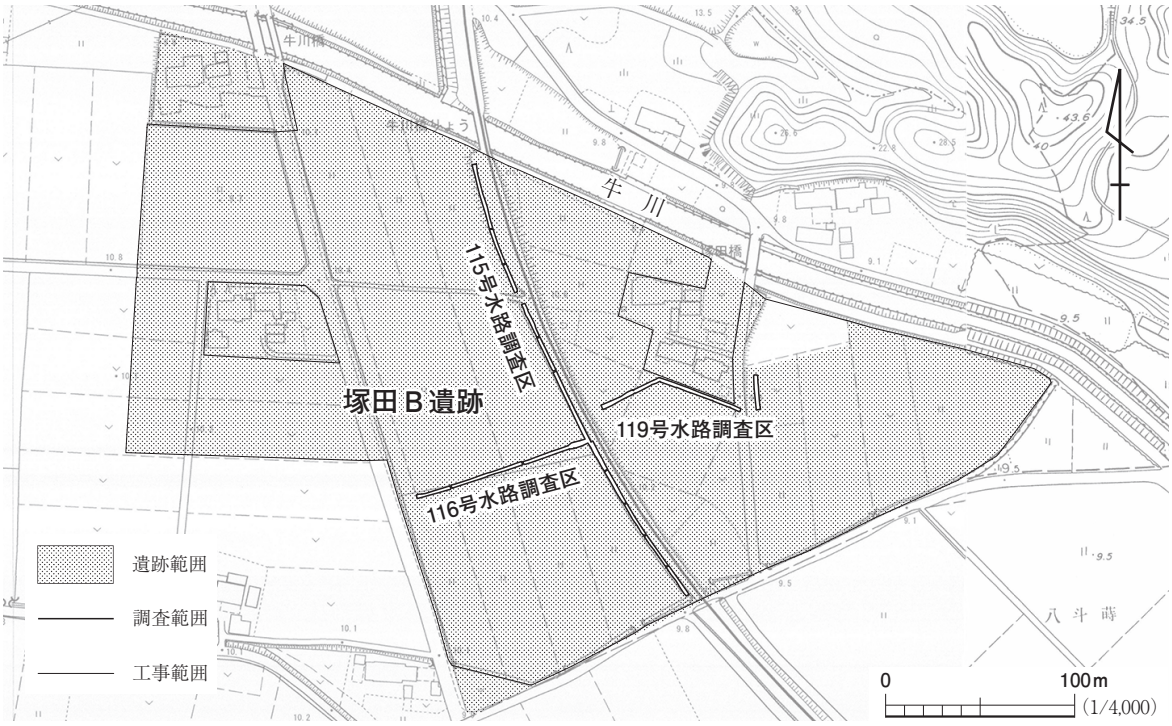



**図２**　工事範囲と遺跡の位置

## 第３節　調 査 経 過

本節では塚田Ｂ遺跡の調査経過について時系列順に記述する。

令和３年５月・12月、令和４年２月に福島県相双農林事務所（以下、相双農林）、県教委、公益財団法人福島県文化振興財団（以下、財団）の三者による協議が行われ、農山村地域復興基盤総合整備事業に伴う水路工事の箇所のうち、塚田Ｂ遺跡の990㎡について保存が必要とされ、記録保存のための本発掘調査が行われることとなった。

財団は県教委との委託契約により、担当調査員１名を配置して、令和４年４月下旬から調査を開始した。

令和４年４月中旬に遺跡の所在する原町区下太田行政区の区長、近隣住民への調査の説明・あいさつを行った。４月下旬より調査連絡所の設置及び重機の搬入を行い、表土除去を開始した。５月上旬からは作業員を導入し、調査区東部の119号水路調査区から遺構精査を開始した。調査の進捗により、119号水路調査区では住居跡や土坑、自然流路跡などを確認した。自然流路跡のうち、１号流路跡は掘削深度が深かったため調査に際し、土嚢付設による壁面崩落の防止など安全対策の徹底をはかった。4号流路跡からは石製模造品やその未成品が多数出土したことから、注意深く掘り下げを行った。

６月初旬から中旬にかけて、長雨による天候不順により現場作業は停滞を余儀なくされながらも、６月中旬には調査区中央の115号水路調査区でも遺構精査を開始した。作業の進捗にともない、７月上旬には新たに調査区西部の116号水路調査区の遺構精査にも着手した。７月下旬には、119号水路調査区270㎡の発掘調査終了確認と現地引き渡しを行った。

また、７月下旬には115号水路調査区の発掘調査も進捗し、住居跡８軒を確認し、この付近に古墳時代前期から後期にかけての集落跡が存在することが判明した。９月中旬には、調査連絡所の撤去や重機の搬出作業など撤収に向けた作業を行い、９月下旬には、相双農林、県教委、財団の三者により115・116号水路調査区720㎡の発掘調査終了の確認と現地引き渡しを行った。これにより、調査範囲990㎡の発掘調査はすべて終了した。

発掘調査と並行して、出土遺物の水洗い、ネーミング、接合等の室内資料整理を適宜進めた。発掘調査が終了した９月下旬以降は、遺構図面の整理、遺物実測図の作成及び図化ソフトによるトレース作業を行った。年の明けた令和５年の１月～３月にかけては挿図の作成、遺物の写真撮影、原稿の執筆を行った。

令和５年度は調査員１名を配置し、引き続き報告書の作成を行った。８月には編集作業を終え、10月に印刷会社へ入稿した。以後、校正と収蔵に向けた整理作業を併行して実施した。

その他、出土炭化物の樹種同定・土器付着物の分析、サンプリングした土壌の古環境分析、石器石材の鑑定及び、多量に出土した石製品のトレース業務に関して外部委託を実施した。

## 第４節　遺跡の位置と地理的環境

本報告書に所収されている塚田Ｂ遺跡は、福島県南相馬市原町区下太田字榎町・高田・塚田地内に所在する。本遺跡の中心は北緯37°36′35″、東経140°59′11″にあたる。本遺跡はJR常磐線磐城太田駅から北西に約600m、海岸線からは約3.5㎞に立地している。

福島県は東北地方南部の太平洋岸に位置する。総面積は約13,782㎢で、全国３番目の県土を有する。本県土は、約８割が山地で占められ、阿武隈高地、奥羽山脈や越後山脈の各山地に隔てられた地形・気候の異なる３地方に区分される。３地方の区分は、日本海側内陸部の会津地方、太平洋側内陸部の中通り地方、太平洋岸沿岸部の浜通り地方である。

本遺跡の所在する南相馬市は、浜通り地方の北部に位置している。東側が太平洋に面し、北側は相馬市、西側は飯舘村、南側は浪江町と接している。市内には、太平洋岸を南北に結ぶＪＲ常磐線や常磐自動車道、国道６号、県道北泉小高線が縦貫している。気候は太平洋の影響を受けた海洋性の温暖な気候で、夏季は比較的涼しく、冬季は降雪が少ない。浜通り地方の地質を概観すると、西側の阿武隈高地周辺は後期白亜紀の花崗岩類を主体とし、石英閃緑岩、花崗岩、珪長岩など多岐にわたる。特に双葉破砕帯や畑川破砕帯周辺の花崗岩類はマグマの貫入を起因として複雑な様相を呈する。双葉破砕帯の東側から海岸平野部にかけては第三系の堆積岩が広く分布している。浜通り地方は、双葉破砕帯の影響によって、西側に阿武隈高地、東側に浜通り低地帯という地形的特徴を示している。双葉破砕帯の西側は阿武隈高地の高嶺が広がる。阿武隈高地の標高は500～700ｍとなり、隆起準平原に位置付けられる。浜通り低地帯は、標高100m以下の低地な丘陵・段丘と平野で構成される。丘陵は浜通り地方北部から南部へ向けて、その範囲を減じている。段丘は高位・中位・低位の３区分にでき、高位・低位は各２面、中位は２面・４面に細分化される。南相馬市周辺の平野は、谷底平野と中位の砂礫段丘で構成されている。

南相馬市の地形は、西から阿武隈高地・河岸段丘地帯・海岸低地の３地形に区分され、西高東低の浜通り地方特有の地形となっている。南相馬市の西側は市内最高峰の懸の森山（536.1m）をはじめとし、八森山、国見山、五台山など山岳性丘陵を示し、太平洋岸に向かって緩やかに標高を減じている。南相馬市の東側は、阿武隈高地から派生する丘陵や段丘が太平洋岸に向かって細長く伸びている。丘陵や段丘は、上真野川、新田川、小高川や本遺跡の周辺を流れる太田川によって開析されている。一部の河川沿いには自然堤防が認められ、入り江を砂州がふさぎ、八沢浦、金沢浦、井田川浦、前川浦などの潟湖が形成された。多くの潟湖は近代の干拓事業により失われたが、小高川沿いの前川浦のみ遺存している。

本遺跡は牛川と太田川に挟まれた谷底平野（沖積地）に立地し、標高は8.5～9.6mで、現況は水田・畑作地である。福島県作製の表層地質図による分類は「砂・泥・礫」で、土壌図による分類は遺跡内の常磐線を挟んで東側が「片草統」と呼ばれる中粗粒灰色低地土で、西側が「小屋木統」と呼ばれ

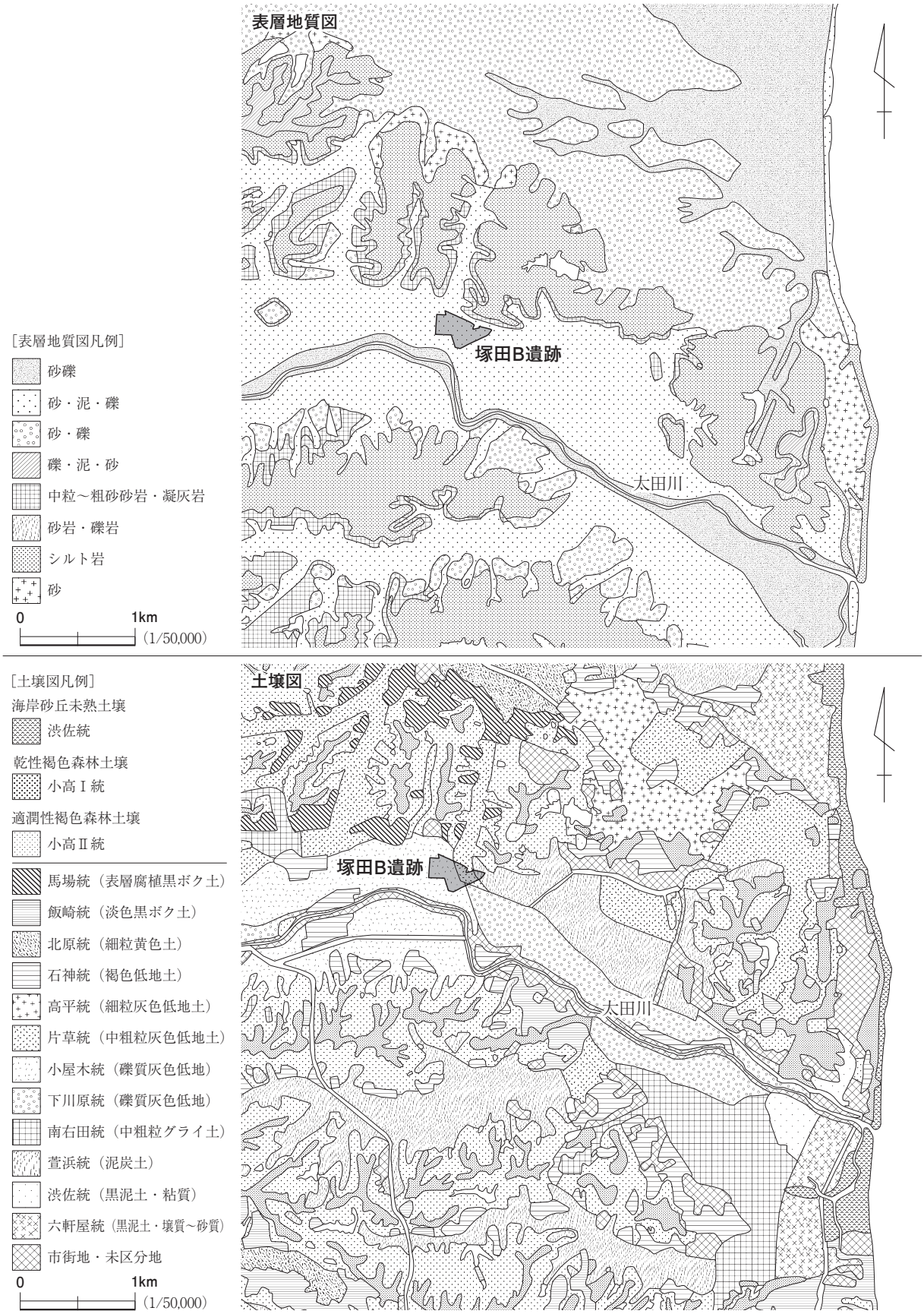



**図３**　遺跡周辺の表層地質図と土壌図

**図４**　遺跡周辺の地形分類図

る礫質灰色低地土壌である。本遺跡の周辺は旧下太田村にあたり、隣接する字名は東側が舟橋、西側が深町、南側が八斗蒔、北側が西廹・川内廹である。本遺跡西側には、相馬太田神社が鎮座しており、国の重要無形民俗文化財相馬野馬追の祭礼が著名である。福島県の作製した「津波想定区域図　市町村別南相馬市　平成23年東北地方太平洋沖地震津波における浸水範囲（実績）」によれば、震災時の津波は本遺跡南東側の磐城太田駅周辺にまで到達したとされる。

## 第５節　歴 史 的 環 境

**旧石器時代**　当該地域で人類の痕跡が認められるのは、後期旧石器時代以降である。遺跡は塩崎丘陵北縁部、雲雀ヶ原台地、畦原台地、阿武隈高地縁辺部の高位・中位段丘上に立地している。荻原遺跡からは、後期旧石器時代前半期とみられるナイフ形石器、スクレイパー、石刃などが 171点出土している。五畝田・犬這遺跡(77)ではナイフ形石器１点が出土している。

**縄文時代**　縄文時代に入ると、遺跡数は旧石器時代と比較して大幅に増加する。縄文時代早期の遺跡は阿武隈高地縁辺部に多く分布しており、赤柴遺跡(73)、原Ｂ遺跡(88)、八重米坂Ａ遺跡(90)などが挙げられる。八重米坂Ａ遺跡は早期末葉～前期前葉頃の集落跡で、狩猟採集生活から定住生活への変遷をうかがわせる。五畝田・犬這遺跡では、早期中葉前半の日計式とみられる土器が出土し

ている。縄文時代前期には阿武隈高地縁辺部に加え、主要河川の両岸に形成された低位段丘上に遺跡の分布が広がる。桜井A遺跡(60)、小池田遺跡(29)、赤沼遺跡(66)、植松C遺跡(41)などが挙げられる。植松C遺跡からは620㎡、層厚最大95㎝に及ぶ遺物包含層が確認されている。各層からは食物残滓とみられる焼骨が出土し、獣骨はシカ、イノシシ、魚骨はタイ科が認められ、往時の食物利用がうかがえる。小高川、宮田川流域周辺には貝塚が多く分布しており、国史跡浦尻貝塚は縄文時代前期後葉～晩期中葉の貝塚を伴う集落跡である。遺跡からは貝塚、複式炉を伴う竪穴住居跡、貯蔵穴などが確認された。縄文時代中期には、塩崎丘陵北縁部に比較的規模の大きい集落跡が分布している。八幡林遺跡(19)、高松B遺跡(34)、植松A遺跡(43)、植松C遺跡や東町遺跡(56)などが挙げられる。東町遺跡では、竪穴住居跡29軒や墓坑、貯蔵穴、土器埋設遺構が確認されている。縄文時代後期～晩期には、河川流域の低地部や海岸浜堤まで遺跡の分布が広がる。天神谷地遺跡（49）や赤柴遺跡などが挙げられ、中期と比較すると小規模で分散居住的な性格がうかがえる。中才遺跡(18)では、土坑や遺物包含層が確認されている。遺物包含層は焼土を多く含み、製塩土器が多く出土している。中才遺跡に隣接する鷺内遺跡(20)では土坑から編組製品が出土している。土坑の性格について堅果類の処理、保管、木材の水漬けなどの機能が指摘されている(川田ほか2019)。

**弥生時代**　弥生時代に入ると、遺跡の分布は縄文時代と比較して塩崎丘陵や大甕丘陵の海岸側、河岸段丘や沖積地に移る。当該地域における弥生時代の遺跡は、桜井式期（中期後葉）が突出して多い傾向が認められる。塩崎丘陵上には天神沢遺跡(23)、天化沢A遺跡(47)、金沢製鉄遺跡群(39)内の南入A遺跡、鳥井沢B遺跡、長瀞遺跡などの遺跡が集中して分布している。天神沢遺跡では、粘板岩製石庖丁の未成品が多く出土している。天化沢A遺跡や南入A遺跡でも同様に石庖丁の未成品が出土しており、石材の産出地に近傍する塩崎丘陵周辺で石庖丁製作が行われていたことをうかがわせる。高見町A・B遺跡(57・61)をはじめとする周辺遺跡は、桜井式土器の標識遺跡として著名である。本遺跡の北側、低丘陵部に立地する川内廻B遺跡群(75)では、遺物包含層が確認されており、桝形式や桜井式の土器が出土している。石器は大陸系磨製石器の太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石庖丁、ノミ形石器、石鏃、石錐、打製石斧、抉入板状石器などが出土しており、中期の石器組成が把握できる資料として重要である。また、太田川周辺の沖積地上では、竹島國基や鹿山茂らによって扁平片刃石斧や石庖丁が採集されている。仲沖遺跡では竪穴遺構や土坑などが確認されており、遺物では桝形式、桜井式、天神原式、天王山式の土器が認められる。

**古墳時代**　古墳時代に入ると、遺跡は新田川流域の丘陵・段丘面、真野川流域の低地部にまで分布が広がる。古墳時代前期では、新田川流域と真野川流域に集中して分布する。新田川の南岸段丘上には国史跡桜井古墳群上渋佐支群(59)が位置し、その周辺には、高見町A遺跡や荒井前遺跡などの集落跡も分布している。五畝田・犬這遺跡では竪穴住居跡20軒が確認され、７軒が発掘調査されている。竪穴住居跡の覆土中からは、蛇紋岩製の管玉や、ガラス製の小玉が出土しており、住居廃絶に伴う祭祀行為と指摘されている。谷地中遺跡では丘陵の緩斜面から竪穴住居跡６軒が確認されている。竪穴住居跡の炉などから出土した複合口縁の大型甕の特徴から、南関東との交流が指摘され

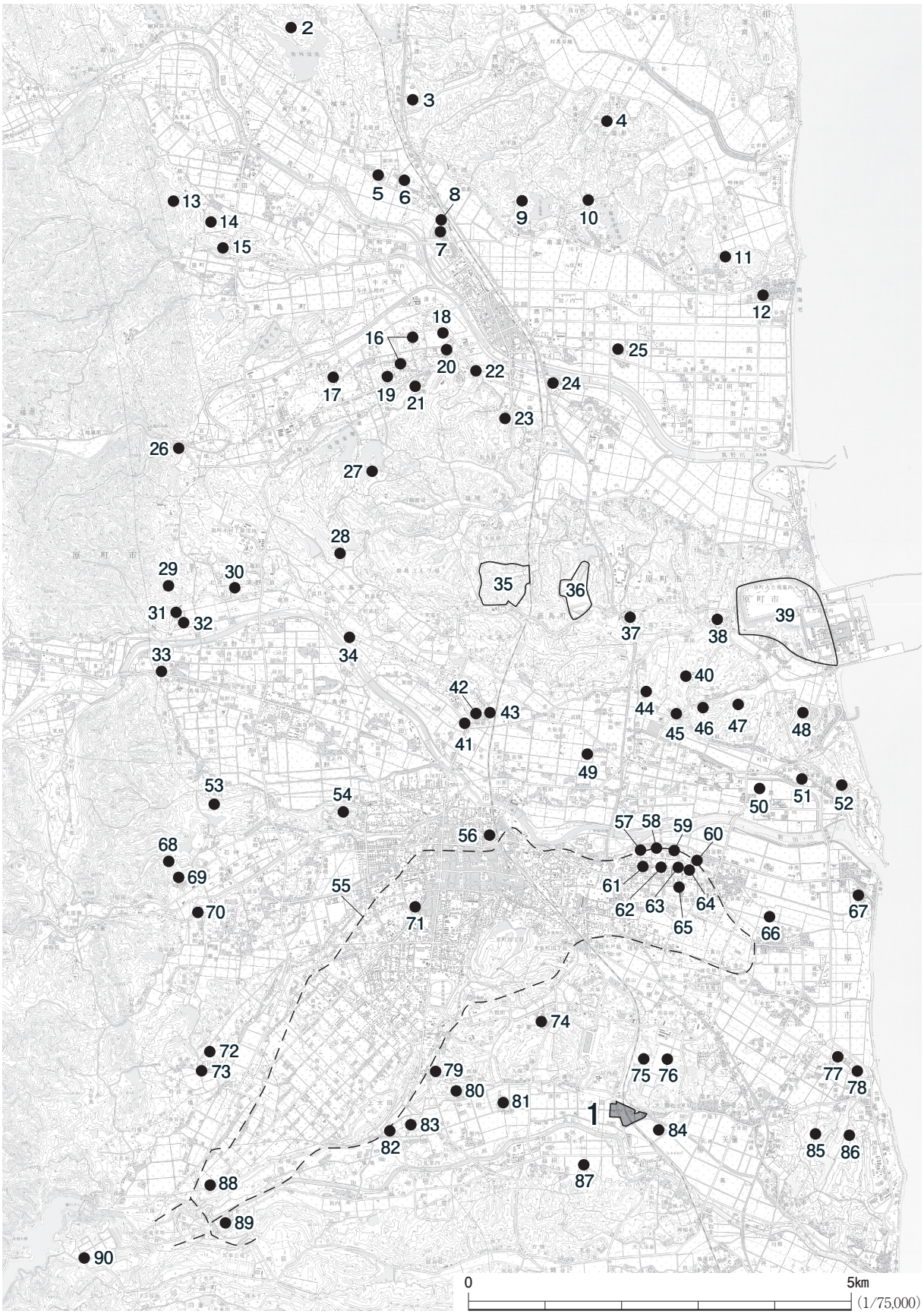



**図５**　周辺の遺跡位置図